

本興寺だより

令和六年 十一月
第二六三号

「闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し、只今も一念無明の迷う心は磨かざる鏡なり、これを磨かば必ず法性真如の明鏡と成るべし」

(宗祖 一生成仏鈔)
境内の落ち葉のじゅうたんを踏みしめるたびに、秋の名残が近いことを感じます。

十一月七日は「立冬」です。今までの涼しい秋から寒い冬へ向かう入口です。暑く燃えた衆議院議員選挙も終わり、与野党逆転して、冬にも似た厳しい政局となるかもしれません。国のかじ取りの重みを一人一人の議員がかみしめて欲しいと思います。

「裏金」や「闇バイト」という言葉が、最近紙面を賑わせています。選挙の争点ともなり、犯罪の助長ともなっています。「裏」や「闇」という言葉には、誰でも悪事に絡まりやすい暗いイメージがあります。

裏や闇は、そこに光が当たらないということです。仏様は、心の中にそれを作ることがあらゆる苦悩を引き寄せるのだと云われています。

人の生活の命をつなぐ基盤は「衣食住」ですが、私達の身体は家と同じです。屋根は瓦屋根もあればトタンもありです。人の頭(屋根)も、髪がフサフサの人であれば、毛が無くてタン板のようにすべすべな人も

います。窓は目に当たります。眉毛は窓の庇(ひさし)です。

口は玄関に当たります。来客は玄関から入ります。家の中に入れる人は安心できる人のみです。好まない人は玄関で帰ってもらいます。食べ物も安全なもののみ食べて体内(家中)に取り込みます。

家が身体(肉体)であれば、心は家の中(室内)に当ります。心の窓を閉め切っていれば、室内(心)の中は暗く陰気に覆われます。

新鮮な空気と明るい光は外からしか入らないので

す。自らの世界(社会)と、身体も心も行動も積極的にかわり、学び、取り入れて生きる

のが、己が輝く生き方であると云われます。血液が一時も止まれば死に至ります。体を循環して生命が保たれるように。また自然界も然りです。川の水は絶えず流れています。溜



水は腐ってポーフラが湧いてきます。

新鮮な氣の流れが家の中を浄化するように、私達の心も戸を開けて一つの悩みを停滞させるなどということ。

不安や悩み、恐れ等に心が停止すれば、先の溜水の

ように、自身の心が死んでしまうのです。

仏様は、心を二つに捉えています。一つは時間空間を越えて不変なるものとしての心があり、これが仏性であり、魂でもあります。もう一つは普通私達が心といっているもので死とともに消滅する心です。

人間の本体は魂であり、霊であると云われます。

のです。変えようと頑なにしないだけなのです。あらゆることに柔軟に変化させて調和して生きなければならぬということでもあります。

諸行無常を受け入れることによって、若いも若きも喜びも悲しみも、現実をありのままに見つめ、今の変化を恐れずに受け入れられるのです。

辛いことでも無常であり、何時かは必ず変化します。どんな時でも人生の新たな、より良き道を見つけることが出来ると云われます。

法華経には、「諸のあらゆる功德を修し 柔和質直なる者は 則ち皆我が身ここにあって法を説くと見る」とあります。



他人に対して善根功德(良き行い)を積み、心が柔和で正直な人は、仏様が側にいて、辛い時には、その試練を乗り越える智慧を授けて

いることに必ず気付けるのだと教えています。神仏の存在を固く信じ、自分の命は偶然ではなく、尊い宿縁の故に今生きていることへの

感謝の念を忘れない人であれば。秋の深まりと共に、紅葉の美しさに、沢山の人が眼光に出かけます。紅葉も、また日没の太陽が沈む風景も、真つ赤な美しさの中で消えていきます。ローンクも消える時、最後に一瞬大きく明るくなります。

人も、何時か臨終を迎える時、輝いた一生だったと思える生き方をしたいものです。明るい鏡のような魂に戻るために。

合掌

本興寺住職 中谷聰秀

冒頭の文のように、日蓮聖人は、人の本当の心(魂)は、綺麗で透明な輝く鏡のようなものであると云われます。この世に生まれ、貪り(むさぼり)の炎、怒りの炎、愚痴の炎に焼かれ、自らを作り出した、この煩惱の炎に気付かず、それに焼かれていることも知らず、知らず知らずのうちに心が疲弊して、心の鏡が濁って、汚れと暗い闇にさ迷っているといわれます。

この心を変えるには、魂の本性は、狭い自己にとらわれず、自然界、社会全体への調和と奉仕が目的であることを忘れないことだということです。

鏡は全てのものを冷静に映し出します。人は物事を、鏡のように澄んだありのままに見つめることが容易ではありません。感情が入り、利害が入るからです。

冷静に物事を観るには、欲をコントロールすることが大切なのです。生きる欲がいけないのです。動物の世界は、食欲はありません。

人は長年生きる上で培ってきた価値観や信念、考えは非常に強固であり、なかなか変えられません。また変える必要もないと固く信じています。

自分の許容できる範囲でしか、人の意見にも耳を傾けられないことが、苦を引き寄せ、苦を解決できないのだと云われます。仏様は「諸行無常」といわれています。これは「全ての事柄は常に変化している」という意味です。森羅万象のように。また人の生き様も、人の身体も人の心も同様です。性格も行動も自分で良い方に変えられる